東京純心大学紀要　現代文化学部　第27号（2023）pp.33 ～ 56

論 文

キリスト／教と食
― 純女学徒隊の乙女らはなぜ末期の水を他者に差し出したのか ―
Christ/ianity and Food
–The Ground for Giving away the Last Water–

田　尻　真理子

Abstract

This paper will examine the importance of “food” or “meal” in Christ/ianity.

In the light of “food” or “meal”, Christianity is very outstanding comparing with other religions. Because in the Testaments –both the Old and the New–there are many scenes or episodes that include food or meal, of which scenes have been painted in many western religious paintings along with, say, “Nativity”, “Crucifixion”. And especially in Catholic mass, the climax is the Eucharist, which has followed “the Last Supper” or “the Lord’s Supper”.

Taking into these in mind, the first chapter confirms the importance of meal in the Old and the New Testaments, the result of which reveals the generosity of God and feast for unknown travelers or the treatment of the poor as the superior virtue. In the New Testament, miracles concerning “food” appears many times. Paying attention to multiplication of bread, we find that this event has two opposite vectors, which are the past oriented vector and the future oriented one. The former means that Jesus is “New Moose” who gives the true bread, the bread of life. The latter indicates the Eucharist.

The second chapter discusses the actual significance of Fast and Feast. According to Laura Hartman, the author of “Consuming Christ: The Role of Christ in Christian Food Ethics”, we fast and feast as/with/for Christ respectively. In the Eucharist, which has both sides of fast and feast and of which the most important is “sharing”, we meet each other and the Christ, become parts of the Christ. And this metamorphose must not limited to the Eucharist but occurs in daily meal.

Then, if daily meal can be sacrament, we could reconsider the last moment of the girls of Junshin High School, who gave away their own water to others, in the light of sacrament. The third chapter examines this possibility.

キーワード：キリスト教、食、旧約、新約、奇跡、秘跡

序

世界中の多くの宗教は、「食」と少なからぬ関係をもっている。それは、ヒンズー教の牛やユダヤ教の豚をはじめとする動物鳥類のような特定の食材の禁忌であったり、イスラム教のハラル食やユダヤ教のコーシャミールのような屠殺法や調理法の指定であったり、ユダヤ教の獣肉と乳製品を同時に食することの禁止のような

食べ合わせの禁忌（合食禁）であったり、過ぎ越しの祭の際の「セダー・プレート」のような、祭事の特定の食事であったり、直会であったり、「喪」の行事[1]であったり、神との力の連鎖を得る「神人共食」[2]であったり、と様々なありかたをしている。

ところで、キリスト教（カトリック）は、「食」の禁忌に関してはむしろ緩やかな宗教といえるが[3]、「食」との関係は極めて濃密である。

それは、カトリックのミサのクライマックスが、キリストの体と血をいただく聖体拝受であることや、数々のエピソードが「食」の場面で展開されていることに明らかである。

他の宗教と比較して、一体にキリスト教絵画に「食」の場面が断然多いことも上の事情を反映していよう。

本論では、「食」の場面を描いた作品を援用しながら、『旧約聖書』、『新約聖書』における「食」の重要性を確認した後、Laura Hartmanに倣って、Feast（ご馳走、饗宴）として捉えられた「聖餐」に先立つFast（断食）のもつ現代的意義を検討する。その結果、Fastという「節制」とFeastという「享受」の両面から成り立つ「聖餐」とは、キリストが我々と出会い、かつ、クリスチャンどうしが互いに出会う場であることが確認される。そこで最も重要な点は、他者と食を「分かち合う」ことである。

ところで本学は長崎の純心聖母会にルーツをもつ。純心聖母会初代院長であったSr.江角ヤスが1964年に東京純心女子学園を創立されたが、それに先立つ1935年、早坂久之助司教が創立された純心女子学院の院長にSr.江角は就任、1936年に長崎純心高等女学校校長に就任された。その9年後、1945年8月9日に長崎に原子爆弾が投下され、高等女学校の校舎、修道院、寄宿舎、幼稚園が全壊・全焼。純女学徒隊（太平洋戦争下の学徒動員された純心女子高等学校の生徒たち）も犠牲となった[4]。長崎原爆の爆心地近くで被爆した生徒たちが苦しい息の中でも「賛美歌を歌いながら、祈りながら」美しい最期を遂げたことはつとに語りつがれているが、彼女たちはまた、自分たちに差し出された水を、周囲の人々に譲って亡くなっていった。ここに、「分かち合い」を重要なモメントとする「聖餐」の秘跡と同様の秘跡が出来していたのではないだろうか。もちろん、従前指摘されているように、「美しい最期」がカトリックの純心教育の賜物であることは当然のこととして、その賜物に「分かち合い」の秘跡がおり下ったとは考えられまいか。

以上を論じるために、第一章（「聖書における食の重要性」）では、旧約、新約それぞれにおける食の重要性に関するエピソードについて宗教画を援用しながら論じる。第二章（「FeastとFastの現代的意義」）では、Laura Hartmanの論考に拠りながら、カトリックミサのクライマックスである「聖餐」の二つのモメントであるFastとFeastが今日持つ意義を考察する。第三章（「純女学徒隊の乙女らはなぜ末期の水を他者に譲ったのか」）では、第二章で得られた結論、すなわち、「聖餐」とは「分かち合い」の秘跡である、ことを受けて、純女学徒隊の「美しい最期」を「分かち合い」の秘跡という観点で捉えなおす。

第一章　『聖書』における「食」の重要性

第一節　『旧約聖書』における「食」の重要性

第一項　神の「惜しみなさ」と人間の愚かさ

『旧約聖書』中にも「食」はしばしば登場する。その多くは神の「惜しみなさ」のあらわれである。

そもそも万物を創造された際、神は

> 「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう[5]。」

と言って被造物いっさいが食べるものに何一つ不自由しないよう図らわれた。

そして楽園追放以前には、「主は見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいでさせ[6]、」「園のすべての木から取って食べなさい[7]。」（傍点筆者）と人間に大いなる寛容―惜しみなさを示している。

しかし人間の浅慮は神の寛容を裏切り「善悪の知識の木」の実をとって食べたことで「生涯食べ物を得ようと苦し[8]」み、「顔に汗してパンを得[9]」なければならないことになる。

かような仕打ちをした神ではあるが、イスラエルの民にはそれでもやはり寛容を示す。

> … 「あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹にさせられる[10]。」…
> 夕方になると、うずらが飛んできて宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた[11]。」

エジプトを出て約束の地に向かう途上、シンの荒れ野で空腹をかこつイスラエルの民たちに、主が天から降らせたパン、「白く、蜜の入ったウエファースのような味がする」マナの件である。

ことあるごとに、「エジプトに残っていればよかった」と毒を吐くイスラエルの民に、「主は夕暮れに…肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。」とモーセは伝えるが、その言葉が現実になってようやく自分たちの神をありがたがるイスラエルの民の浅はかさは幾度となく繰り返されるものだ。

> あなたたちはわたしの掟を行い、私の法を忠実に守りなさい。そうすれば、この国で平穏に暮らすことができる。土地は実りを生じ、あなたたちは十分に食べ、平穏に暮らすことができる[12]。（傍点筆者）

と、神が民に告げているにもかかわらず、エジプトを発って二年目（民数記10.11）シナイを出発して三日目のこと、

> 「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。今ではわたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない[13]。」

と不満をぶちまける。その声を聞いて憤った神は、宿営を焼尽くすほどの火を送ったものの、

> 「あなたたちは肉を食べることができる。主の耳に達するほど、泣き言を言い、誰か肉をたべさせてくれないものか、エジプトでは幸せであったと訴えたから、主はあなたたちに肉をお与えになり、あなたたちは食べることができる。…一か月に及び、ついにあなたたちの鼻から出るようになり、吐き気を催すほどになる[14]。」

と言って、大量のうずらを宿営の近くに落とし、民は「終日終夜」肉を貪る。貪欲に肉を貪るものたちはツィンの荒れ野で水がなくなり、徒党を組んで「こんなところになぜ連れてきた」と詰め寄れば、神はモーセが岩から水を出す奇跡をおこす。

しかし、エジプトからの道中、神を信じる者には入用なものが与えられてきたにもかかわらず、

> 「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます[15]。」

と言って神とモーセに逆らう。40年におよぶ荒れ野のさすらいの道中、「父が子を背負うように、あなたを背負ってくださった」にもかか

わらず民はことほどさように神を信じない。

にもかかわらず、民に約束されていたのは、

> …平野にも山にも川が流れ、泉が湧き、地下水が溢れる土地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろが実る土地、オリーブの木と蜜のある土地である。不自由なくパンを食べることができ、何一つ欠けることのない土地である…あなたは食べて満足…[16]」

する「良い土地」なのである。

ただし、神の「惜しみなさ」が注がれるのは、あくまでも民が法と掟と戒めを守る限りにおいてであり、これが破られるならば恐ろしい制裁が下る。レビ記では、神の掟に従わないならば恐ろしい懲らしめが下ることがモーセを通して語られている。しかも、ひとたび神への造反が発覚するや、二倍返しならぬ七倍返しの懲罰を五回にわたって下すのだ。

> …わたしの契約を破るならば、わたしは必ずあなたたちにこうする。すなわち、あなたたちの上に恐怖を臨ませ、肺病、失明や衰弱をもたらす熱病にかからせる。あなたたちは種を蒔いてもむなしい。敵がそれを食べつくす[17]。…（傍点筆者）
>
> このような目にあってもまだ、わたしの言葉を聞かないならば、あなたたちの罪に七倍の罰を加えて懲らしめる。…地に作物は実らず、地上の木に実はならない[18]。…（傍点筆者）
>
> それでも、まだ私に反抗し、…あなたたちの罪に何倍の災いを加える。…あなたたちの…家畜を滅ぼし[19]、…
>
> それでも、まだ私の懲らしめが分らず…あなたたちに七倍の災いを下す。…焼いたパンは量って配り、あなたたちは食べても満腹することはない[20]。（傍点筆者）
>
> それでも、またわたしの言葉を聞かず反抗するならば、…あなたたちの罪に七倍の懲らしめを加える。あなたたちは自分の息子や娘の肉を食べるようになる[21]。（傍点筆者）

にわかには「神様」の言葉とは思えない台詞ではあるが、神の掟を破ることの重篤さが伝わる。

ところで、興味深いのは、神の「惜しみなさ」が十全に発揮されるのが「食物」であるのと同時に、神の懲罰も「食物」の欠如として与えられる点だ。さらに、上には述べていないが、神が求める「捧げものの一覧」にも、膨大な食物・食材があげられている。もちろん人間の生命維持にとって食物は必要不可欠である以上当然かもしれぬが、ほぼ変質狂的な食物の羅列[22]は圧巻である。

ただし、「食」が旧約の中に多出しているのは、それが生身の（現世の）人間の「生」に不可欠だからというだけでなく、神とひととの契約の一契機であるため、という重要な位置づけがあたえられているからだ、と考えられよう。

第二項　最高の道徳的善としての他者への振る舞い

図1はラヴェンナにあるサン・ヴィターレ聖堂のモザイク「アブラハムの饗応」（547）である。

> 主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。目を上げてみると、三人の人が彼に向って立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、言った。
>
> 「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。…何か召し上がるものを調えますので、疲れをいや

図1　「アブラハムの饗応」、サン・ヴィターレ聖堂、ラベンナ（547）

パン

仔牛のシチュー

図2

してから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから[23]。」（傍点筆者）

アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。
「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」アブラハムは牛の群れのところに走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召使に渡し、急いで料理させた。アブラハムは凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした[24]。（傍点筆者）

図中左三分の二に上のエピソードが描かれ、右三分の一には、「イサクの犠牲」が描かれている。左端の幕屋からはアブラハムの妻、サラが顔をのぞかせている。テーブルに着く中央の三人の傍らで、アブラハムが仔牛料理を恭しく運び給仕する姿が描かれている。

アブラハムが、三人をもてなすエピソードの後、三人のうちの一人が、来年、妻サラが男の子をもうけることを告げるが（ちなみに、その時、サラは89歳、アブラハムは99歳である）、その男の子こそ、イサクであり、右の絵は主の命に従って、まさにイサクを屠ろうとする瞬間である。異時同図法[25]で、イサク誕生以前とまさにイサクが死なんとする（実際にはアブラハムの主への忠誠が認められてすんでのところで

死を免れる）瞬間が描かれることで、「饗応」という和やかな場面が際立つと同時に、一種の緊張感が画面を支配する。

99歳という老人が「走り出て迎え」、「急いで」天幕に戻り、「牛の群れのところに走って行」く。驚くべき気力、体力である。「走る」ことには、「家族、親戚を迎える喜びを表現する行為[26]」だそうだが、ここでは、もてなしへの気力に満ち満ちている様子が活写されている。そして「早く」パン菓子を用意するように命じ、「急いで」仔牛料理を誂えさせる[27]。客人たちへのもてなしに瑕疵がないように、お待たせすることのないように、という心遣いの表れだ。

古代中東では、「旅人が天幕のまえに立つことはもてなしを求めていることを意味した[28]」が、同時に旅人へのもてなしは最高の善と考えられた。行きずりの見知らぬ旅人への饗応は、見返りを得る可能性がきわめて低いからだ。

上述のように、アブラハムは喜んで、自発的に、心を込めてもてなしに臨んでいる。道徳的行為の規範だからと言ってもてなしの求めに応じているのではない。アブラハムの主への帰依の深さが自然と彼に最高の道徳的善を行わせているのである。

この主への帰依の深さは、「我が子を手にかける」、しかも100歳にしてようやく妻との間に生まれた独り子を生贄としてささげることにいささかのためらいも見せなかったことにも見られよう。図１のサン・ヴィターレの「アブラハムの饗応」の右端に「イサクの犠牲」が描かれていることもこうした事情によろう。

この場面からも、「最高の善」という重要な行為と食が不可分であり、旧約の中で食が重要な役割を担っていることが確認できる。

また、次のヨブ記に見られるように、主に従う者は、「貧者との分かち合い」を怠るものではない。

私が貧しい人々を失望させ
やもめが目を泣きつぶしても顧みず
食べ物を独り占めにし
みなしごを飢えさせたことは、決してない。
いや、わたしは若いころから
父となって彼らを育て
母の胎を出たときから
やもめたちを導くものであった。
着る物もなく弱り果てている人や
からだを覆うものもない貧しい人を
わたしが見過ごしたことは、決してない。
彼らは常に私の羊の毛でからだを暖めて
感謝したのだ[29]。（傍点筆者）

この一節は、神の義に従って生きる高潔なヨブが、貧者や孤児、やもめなどの「社会的弱者」を保護していることを訴えている部分であるが、ここでも、「食べ物を独り占めしない」、「みなしごに分かち与える」という行為が冒頭に登場することで、「社会的善」の実行にあたって「食」が重要な位置を占めていることが確認できる。

「食物の分かち合い」の行為は「見捨てられ放置されている死体を丁寧に葬ること」と同様の善行とされる。

シャルマサルの存命中、わたしは同族の者たちに慈善の業を行った。飢えた人々に食べ物を与え、裸の人々には着物を着せ、また同族の誰かの死体がニネベの町の城外に放置されているのを見れば、埋葬した[30]。

以上、神の側からは、神の「惜しみなさ」の表れとして、「食」の重要性が、また人間の側からは、「善」の実行の契機としての「食」の重要性が確認できた。

第二節　『新約聖書』における「食」の重要性

第一項　食をめぐる奇跡

図3は、イスラエル、タブハにある「パンと魚の奇跡教会」の「パンと魚のモザイク」である。

人口に膾炙した、わずかな魚とパンでキリス

図３　パンと魚の奇跡教会モザイク、
タブハ、イスラエル（５～6C.）

トのもとに集まった多くの会衆の腹を満たしたエピソードである。新約では、「カナの饗宴」のワインのように、わずかなものを増やして人々を満足させる奇跡が登場する。このモザイクはガリラヤ湖畔で五つのパンと二匹の魚[31]を五千人に分け与えた奇跡を描いている[32]。

マタイによれば、領主ヘロデがヘロディアの娘の求めに応じて、洗礼者ヨハネの首をはねて殺害し、ヨハネの弟子たちが遺体を埋葬したことを聞いたのち、あるいはマルコ、ルカによれば、伝道のために送り出していた12人の弟子たちの行いや教えの報告を聞いたのち、イエスはガリラヤ湖畔の人里離れたところへ赴く。ところが大勢の群衆がイエスの後を追った（マルコによれば群衆が先にイエスらの行き先に到着していた）。食事をする暇もなかったため人里離れたところに赴いたはずのイエスは、群衆を見て哀れみ、病人を癒した（マタイ）り、教えを語ったり（マルコ）、「神の国について語り治療の必要な人々をいやしておられた[33]。」そうこうするうち

> 夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買いに行くでしょう。」イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」イエスは、「それをここに持ってきなさい」と言い、群衆には草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどであった[34]。（傍点筆者）

このエピソードの中には二つの逆行する時間的ベクトルが見られる。一方は過去向きのベクトルで、先述した、出エジプト記におけるマナの奇跡[35]。百瀬文晃氏も指摘するように[36]、マナの奇跡を踏まえると、イエスがパンを増やして群衆の腹を満たしたエピソードは、イエスとモーセを二重写しにし、イエスが「新しいモーセ」として、「真の糧」を人々に与える者だというメッセージを伝えていよう。

もう一方は、（イエスの存命中から見た）未来向きのベクトルで、カトリック教会の「聖餐式」（主の晩）、「ミサ」）である。上の引用文中、「五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて」の傍点箇所は、福音書の他の箇所にもたびたび登場する。つまり聖書が記述されていた原始キリスト教会の中の「決まり文句」であったことがわかる。そればかりか、「パンを取り、感謝をささげ割って弟子に与えて」という現在の聖体拝領の典礼文にも一致する。つまり、ちょうどイエスが五千人の群衆の腹を満たしたのと同様に、ミサの聖体拝領のたびに、パン（と葡萄酒）を介してイエスが現にそこにおられることを信徒は確信する。福音書の「主の晩餐」（マタイ 26.16-30、マルコ 14.22-26、ルカ 22.15-20、１コリ 11.23-25）を我々はミサのたびに祝う[37]。

一同が食事をしているときに、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい[38]。これはわたしの体である。」また、杯をとり、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である[39]。」

パンを増やす業は単に人々の空腹を満たして人々を喜ばせたり、驚かせたり、追従させたりするための奇跡ではなく、同時代の人々にイエスを新しいモーセと気づかせ、後の世の人々には、パンを介してイエスが常に現在していることを確信させるエピソードではないだろうか。

第二項　食事を共にする

奇跡の場面のみならず、「食」が重要なメッセージを伝えるのは、キリストが他者と食事を共にする場面である。

ここで問題となるのは、イエスが「何」を食べたか、ではなく、「誰」と食べたか、である。

図4は「聖マタイの召命」である。

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。

ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐みであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである[40]。」（傍点筆者）

図4　カラヴァッジョ、「聖マタイの召命」、（1599）

カラヴァッジョの「聖マタイの召命」は、街道沿いにある収税所で、イエスがマタイに「私に従いなさい」と言われた瞬間を描いたのであろう。従来の解釈では、正面の少し年配で髭面の、自分を「儂のこと？」とでも言いたげに指さす男がマタイとされていたが、近年は、左端の俯いて金勘定にいそしむ若者がそうだと言われている。ならば、正面の男が指さすのもこの若者であるし、キリストやその手前の人物が指さす方向も一致しおり、説得力がある。この場面は「私に従いなさい」とイエスが言った瞬間とそれが自分に向けられた発話であるとマタイが気付く前のほんの一瞬をダイナミックに切り取ったものだ。その一瞬のダイナミズムは、――それはマタイがキリストに帰依し従前の生活を捨てる、彼の生の転換のダイナミズムでもあるが、――カラヴァッジョ特有の光と影のコントラストで表現されている。

さて、引用傍点部分に注目すると、「徴税人」は「罪人」と同格扱いされていることが分る。決してことのほか好かれることもないであろうが、かといって嫌われ者でもない税務署のお役人を思い浮かべるとなかなか合点がいかない。

だが、当時の「徴税人」は同胞から蛇蝎のごとく嫌悪されていたという。ローマ帝国は税金の徴収を地元の人に委託していたのだが、この徴税人たちが、ローマ帝国に収める以上の金額を集めていたことや、異教の神々が刻印されたコインを扱っていたためだという[41]。

このコインの刻印の件はなかなか根深い問題を孕んでいるように思われる。第一に絶対的一神教であるユダヤ教の信徒たちとって、ギリシア―ローマ神話の多神教の神々は、許しがたかったに違いない。さらに許しがたいのが、その神々が「刻印」されていたことだ。モーセが授かった「十戒」にはこうある。

> あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない[42]。

徹底したイコノクラスム（偶像否定）である。「いかなるものの」と言った上で、さらに「天にあるもの」、「地にあるもの」、「地の下の水の中にあるもの」と念入りに付け加えている。そもそも、ヘブライの世界では、存在物は常にダイナミックに生成変化するものであり、静止したものは存在しないと考えられていた以上、静止した「像」もそもそも存在しない、ないし虚構と捉えられていた。こうしたユダヤ教の世界観を持つイエスの同時代人たちには、単に異教の神々が刻印されている、というだけでなく、「像」が刻まれていること自体でコインが不浄の物と思われていたのであろう。

そうしたコインを扱うがために、罪人同様見下げられていたマタイをイエスは召命し、かつ食事を共にしたのだ。

徴税人はまた、娼婦とも同列に置かれていた。

「働け」と父親に命じられて断ったのち思い直して働きに出かけた兄と、同じように命じられて「はい」と言いながらも出かけなかった弟のどちらが父の意に叶ったか、とイエスは問う。イエスの答えはこうだ。

> 「はっきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった[43]。」（傍点筆者）

こうした、いわば社会の最下層人である、罪人、娼婦、罪人とイエスが食を共にしていたことは、彼の数々の病気癒しとともに「社会革命」、あるいは「当時のユダヤ社会の権力機構に挑戦状を突きつける」事態であると、『治癒神イエスの誕生』の著者、山形孝夫は述べている。

インドのカースト制度に見られるのと同様、被差別者との食事は、ファリサイ派のような「正統派ユダヤ教徒」にとって許すべからざる行為だったからだ。それを敢えて、

> 人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ。』と言う[44]。（傍点筆者）

と、罵られるように、公然と食を共にしたのである。このようにして、イエスは律法を遵守することよりも、「義の道」を信じた被差別者を「被」差別者の括りから救い出し、疎外から解放したのである。それが、「当時のダヤ社会の権力機構に挑戦状を突きつけ」たことの内実である。

以上、「食」にまつわるイエスの生前の逸話を概観し、その意味を尋ねた。パン増やしの奇跡は、二方向のベクトルを持つ意義があること、また被差別者とのイエスの食事は、当時の社会構造に対する実践的批判であることが確認された。

第二章“Fast”と“Feast”の現代的意義

本章では、Laura Hartman著、“Consuming Christ :The Role of Jesus in Christian Food Ethics”に倣って、「最後の晩餐」に由来する“Feast”（ご馳走、饗宴）として捉えられる「聖餐」とそれに先立つ“Fast”（断食）のもつ現代的意義を検討する。

先に述べたようにキリスト教は厳しい食禁忌、制限をもたない[45]。「食」に関して際立っているのはむしろ、Hartmanも指摘しているように、表面上相反する二つの実践、すなわち、「断食Fast」と「饗宴Feast」をクリスチャンがキリストの生涯そのものから継承している点だ。禁欲的な洗者ヨハネに倣ったキリストはしばしば断食をした一方、「大食漢で大酒飲み」とも呼ばれていた。

Hartmanは、「断食」と「饗宴」という両極端の折り合いをつけ得るのは、キリスト教徒にとっての規範的な「食」である、カトリックミサの聖体拝領においてである、と指摘する。

現在、われわれが与っている聖体拝領において「断食」と「饗宴」が調停されているとは、いかなる事態か。以下、この二契機の意味と現代的意義を確認したい。

第一節　キリスト「のように」、「とともに」、「のために」断食する

第一項　Fast「断食」とは

イザヤ書には「断食」について次のようにある。

> わたしの選ぶ断食とはこれではないか。
> 悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。
> 更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与えさまよう貧しい人を家に招き入れ
> 裸の人に会えば衣を着せかけ
> 同胞に助けを惜しまないこと[46]。

「断食」は形通りに「食を断つ」ことのみではないことを、この一節は示している。この箇所の直前には、「断食をしながら争いといさかいを起こし／神に逆らって、こぶしを振るう。／…そのようなものがわたしの選ぶ断食／苦行の日であろうか。／…それを、お前は断食と呼び／主に喜ばれる日と呼ぶのか[47]。」（傍点筆者）とあるので、明らかに「儀式」として形式的に「断食」を行っていても、憎しみや戦いをやめない限り無意味であることが訴えられている。むしろ、イザヤの選ぶ「断食」は「義」を行うことに他ならない。逆境にある者、貧しいものに自分の持てる物を分かち合って助けることが「断食」なのだ。

イエスもイザヤ同様、型通りの「断食」を厳しく諫めている。

> 「断食をするときには、あなたがたは、偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない。偽善者は、断食しているのを人に見てもらおうと、顔を見苦しくする。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。あなたは、断食するとき、頭に油をつけ、顔を洗いなさい。それは、あなたの断食が人に気づかれず…[48]」（傍点筆者）

貧者への「施し、祈り、断食の三つの行いが最も重要であると考えた[49]」ユダヤ人社会で、これ見よがしの善行がよほど横行していたのであろう。形ばかりの「断食」は主に受け入れられないと説いたイザヤ書よりもはるかに厳しく、「いかにもしています風」の断食に業報の鉄槌が既に下っている、と戒める。

第二項　キリストのように／とともに（連帯して）／のために断食する

もちろん、イエス自身、断食をしている。ことに洗者ヨハネからヨルダン川で洗礼を受け伝道を始める前には、40日間「…夜も昼も断食した…[50]。」あるいは、弟子たちに食事を勧められても、「わたしの食べ物とは、わたしをお遣

わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである[51]。」と言って食事をとろうとしなかった。

キリストを模範とするクリスチャンにとってこの「断食」にはどのような意味があるのか。Hartmanは三つの断食の意義を挙げている。

第一に、キリストを体現するためにキリスト「のように」断食する。

たとえば、アシジの聖フランシスコが1221年に定めた会憲では、万聖節からクリスマスまで、公現節から復活祭までおよび毎金曜日に断食することになっている[52]。それ以外の時にも聖フランシスコおよびフランシスコ会の修道士たちはできるだけ食べないよう心掛けていたという。これは、キリストの清貧に倣い、これを体現するためであり、いわば「キリストのように」断食するのである。

第二に、キリスト「ともに／と連帯して」断食する。

キリストに倣おうとする信徒はまた、清貧を貫いたキリストに連帯して、貧者のためにキリストともに断食ないし節約する。

> 『…わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである[53]。』

から、貧者や社会的弱者のために断食／節約することは、すなわちイエスのためにしたことである[54]。

第三に、キリストの「ために」断食する。

キリストに重ね合わされた「誰か」、あるいは「何か」のために断食する。Hartmanがここで挙げる例は、徒に屠殺される食肉動物や（Andrew Linzey）、工業的農業によって損なわれる表土だ（Wendell Berry）。

「すべての無垢なる、苦しむ被造物に十字架にかけられた者（＝キリスト　筆者）の顔を認める[55]」Linzeyにとって「動物が苦しむことは、キリストの無実の不当な苦しみに他ならない[56]。」ため、クリスチャンは動物を食べるべきではない、と論じる。キリスト自身の犠牲が、聖体拝領のたびに、血を流さずに記念されるのであるから、それ以上に動物を犠牲にすることはない、というのだ。彼はキリストの「ために」肉食を控えるよう促す。

Wendell Berryは、「表土」をその受動性や死から生を創出する力ゆえに「キリストに似たもの[57]」と称する。Linzeyの食肉動物同様、表土も工業的農業によって不当に犠牲にされていると彼は指摘する。この悲劇的な犠牲から得られた食料を口にすることをBerryは望まない。

LinzeyにせよBerryにせよ、動物や表土の犠牲によってキリストの犠牲が無駄に繰り返されることのないように、我々が替わって別の犠牲を払うことを説く。すなわち、肉を控える、あるいは、環境に優しく栽培された食物（それは高価だ）を選ぶ、など。

苦しむ被造物のうちにキリストを見出し、さらなる犠牲をキリストに払わせることのないよう、我々が「代理の犠牲を払う」＝「かわりに断食する」という構図を、動物倫理、環境倫理に落とし込んだような上の議論は、筆者にいささか牽強付会の感を免れない。しかし、世界的な食糧危機や環境問題、農業問題が喫緊の課題となっている現代における“Fast”の意義は、食の倫理を考察する指標とはなろう。ただし、「食の倫理」を検討する場合、“Fast”＝断食－節制の対極にある“Feast”＝饗宴－ごちそうにも触れなければ不十分である。

第二節　キリスト「のように」／「ともに」／「のために」大いに食べる宴を張る

第一項　Feasting「大いに食べる」とは

Hartmanによれば、「饗宴に与る＝大いに食べる、とはお祝いの食事の謂いで、食物の形で神が下さるもの一切の豊かさと栄養を味わうことである[58]。」

本稿第一章第一節第一項にあるように、旧約にもこれは登場している。

新約においても、キリストは魚とパンの奇跡（本稿第一章第二節第一項）や「奇跡の漁り」（図5）や「カナの饗宴」（図6, 7）で惜しみない供給者として登場している。

> イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると…二そうの舟が岸にあるのをご覧になった。漁師たちは船から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、…シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった[59]。」

この直後、イエスがシモンに「あなたは人間をとる漁師になる。」と告げて、彼が最初の弟子となる。一晩中釣果が上がらず、あきらめて片付け始めたシモンたちは、「網が破れ」るどころか、二そうの舟が沈みそうなほど大量の魚がかかった奇跡の業に驚き、かつ、いっさいをなげうって「イエスに従った」のである。

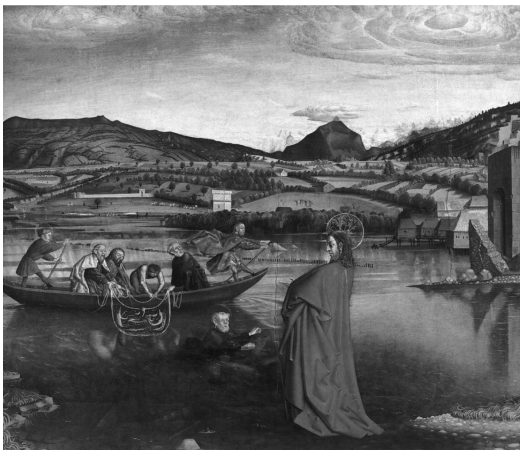

図5　コンラート・ヴィッツ、「奇跡の漁り」、（1443−1444）

図5、コンラート・ヴィッツの「奇跡の漁り」は、上述のルカの一節を表したものであるが、舞台はヴィッツの同時代のジュネーヴ湖畔の風景とモンブラン（キリスト頭上）である。身振りや図式的な衣紋はゴシック風だが、恐ろしいまでの写実への意欲に満ちている。たとえば、湖のさざ波、湖面の建物や人物の反映、水中の魚や湖に飛び込んでイエスのもとに急ぐシモンの下半身など。全体の構成はゴシック的であるものの、細部の描写は写真と見まごうばかりだ。おそらく、同時代の鑑賞者は、この場所を容易く同定し、そこに描かれた人物たちと自分を重ね合わせ、信徒の従順さとキリストの寛大さ（沢山の食べ物！）を感じ取ったに違いない。

図6, 7はそれぞれジオットとヴェロネーゼ

図6　ジオット、「カナの婚礼」、（c.1305−10）

図7　ヴェロネーゼ、「カナの婚礼」、（c.1562−1563）

による「カナの婚礼」である。

> 三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエススは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだきていません。」しかし、母は召使たちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。…イエスが、「水ガメに水をいっぱいいれなさい」と言われると、召使たちは、かめの縁まで水を満たした。…世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。…世話役は…花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておかれました[60]。」

ゴシックの画家ジオットの「カナの婚礼」では、浅い空間に、一列に並んで婚礼の花嫁（中央）、花婿（左端のキリストの隣）、マリア（花嫁の隣）をはじめとする招待客が描かれている。イエスは食卓を挟んで立つ召使の少女に、甕に水を満たすよう伝えている。異時同図法で、画面右端手前では、その指示に従って六つの水瓶に水を満たしている。水瓶の向こう側では、世話役が水から変化したぶどう酒の味見をしている。人々は彫像のように静止し、全体が大変にスタティックで静かだ。

これに対して、ルネサンスのヴェロネーゼは、ヴェネツィア派らしい絢爛たる色使いで、百人以上もの人物から成る饗宴を描いている。動きに満ちた画面からは人々のざわめきすら聞こえてくるようだ。中央では楽師らが宴席に奏楽の華を添えている。左端に花嫁花婿が、中央にキリストとマリアが描かれている。ジオットの作品がカナの饗宴のエピソードを忠実に再現しようとしているのに対し、この作品は、「饗宴」を口実に、群衆と大空間を描くことが目的のようだ。右端ですでにぶどう酒となった液体を甕から小分けにしている情景がわずかに「カナの饗宴」らしさとなっていようか。

この相違を中世的神学的世界観のもとに生きたジオットとルネサンスの人間中心主義復興下のヴェロネーゼの宗教観の相違に帰すことも出来ようが、双方とも「気前の良いもてなし」を伝えていることに変わりはない。前者は六つの甕にぶどう酒を満たすことで、後者は卓上のご馳走やバルコニーで配膳の準備にいそしむ大勢の人物によって。「饗宴」の意義とは「気前の良いもてなし」を大いに楽しむことに他ならない。

第二項　キリストのように／とともに／のために（饗宴で）食べる

さて、クリスチャンにとっての“feast”の意義とは何か。Hartmanは「断食」同様、三つの意義を掲げる。

第一は、キリスト「のように」食べることだ。キリスト「のように」食べるとは、「キリストがしたように、楽しく開放的に、つまりどんな人とも、誰とでも一緒に食べることである[61]。」

第二は、キリスト「とともに」食べることである。それは、キリストと目される人々を手厚くもてなすことだ。

前節第二項でも触れたが、『…わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである[62]。』の「最も小さい者」は、食べ物がなく飢えているもの、飲み物がなくのどが渇いているもの、服がなく裸でいるもの等々、所謂困窮しているもの、困っている人である。ベネディクト会の会則や、Dorothy Dayが設立者の一人である「カトリック労働者運動」の活動がよい例だが、こうした困窮者たちを客としてあたかもキリストであるかのように歓迎し、最善の食事を提供し、

図8　ティツィアーノ、「エマオの晩餐」、（c.1535）

図9　ブルーマールト、「エマオの晩餐」、（1622）

栄誉ある、愛する客として「ともに」食事をするのである[63]。

第三は、キリストの「ために」ご馳走を食べることだ。それは、創造主としての、寛大な供給者としてのキリストに敬意を払い、感謝の気持ちを以て食物を享受することである。真に食事を享受すること、すなわち食事に感謝し、味わいながら食べ、食事によって身体も魂も養うことを現代人は疎かにしがちだとHartmanは指摘する[64]。クリスチャンがキリストのために宴を張る際、祝福し感謝の祈りを捧げることは重要な要素である。このようにすることで、キリストに倣い、神の祝福を感謝と畏敬の念をもって受けとることができるからだ。

以上、「断食」も「饗宴」もそれぞれ意義があり必要であることが明らかになったが、この相反する要素はどのように関わり合うのか。Hartmanは、その鍵が「聖体拝領」にある、と説く。

第三節　クリスチャンにとっての規範的食としての聖体拝領

第一項　「聖体祭儀（ユーカリストeucharist）[65]」とは

Hartmanは、聖体拝領を次のように定義する。「パンとぶどう酒を儀式において分かち合うすべてのクリスチャンの実践で、「主の食事」、「主の晩餐」とも「交わり」とも呼ばれる[66]。」

聖体祭儀の先駆は旧約聖書に散見するが、もっとも中心的なのは「過ぎ越しの祭」、ユダヤの民がエジプトの隷属状態からの脱出を記念する祭である。現在でもユダヤ教徒は、図10のセダー・プレートで過ぎ越しの祭を祝う。

セダー・プレートのそれぞれの食品は、奴隷としてエジプトにいた時代の苦境を記念する意味を持つ。以下、山口里子、『食べて味わう聖書の話』に従って[67]、食品の持つ象徴的意味を挙げる。祝福の後、最初に①’の塩水に浸して野菜（パセリ、セロリ、ポテト等）を食べる（①カルパスKarpas）。野菜から垂れる塩水は、エジプトで流された涙を表す。②マロールMaror 苦菜（チコリ、ぜにあおい、朱大根等）はエジプトでの苦しみの象徴で、エジプトを離れた後でも先祖のエジプト時代の苦しみを忘れないように食される。③ハロセットCharoset苦菜につけて食べる茶色のディップ（レーズン、りんご、デーツ、いちじく、オリーブ、杏、ざくろ、アーモンド、シナモン、小麦、蜜・ワインを混ぜて作る）は、エジプトで作っていた煉瓦の象徴である。④ズロア

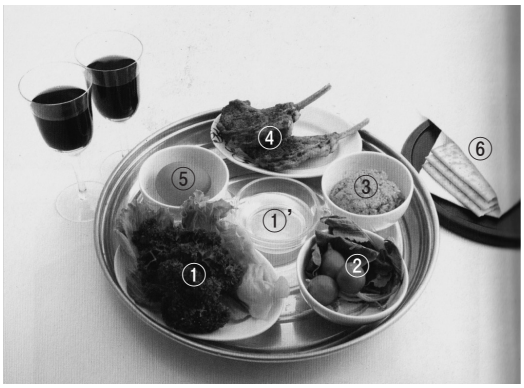

図10　セダー・プレート

Zeroaは過ぎ越しの日の「犠牲の子羊」のシンボル。⑤ベイツァー Beitzahは固ゆで卵で、弔いのシンボル。⑥マツォット Matzotは種なしパンで、出エジプトの際、パンを発酵させる間もなく大急ぎで食べたことを記念する。

セダーの食事の間、ハッガーダーの祈りが繰り返され、『出エジプト』の物語やイスラエルの民を形成してきた物語が朗読される。このようにして、イスラエルの民という共同体のアイデンティティと一致が強められる。

過ぎ越しの祭の食事同様、聖体祭儀も共同体を規定し共同体を形成する儀式といえる。聖体祭儀はキリストによって使徒たちの小さな集団に対して制定され、キリストの死後この使徒たちが最初のキリスト教の共同体を作りだし、聖体祭儀を伝えていったからだ（「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち…[68]」）。

上にも引いたコリントの信徒への手紙の中で（コリントの信徒への手紙Ⅰ 11.17-34）、パウロは主の晩餐のあるべき姿を説いて、コリントの信徒たちの集まりが主の晩餐を適切に実行することによって堅固なものになることを望んでいるのはその証左となるだろう。

第二項　「節制」と「享受」の場としての聖体祭儀

ところで、Hartmanは、聖体祭儀が「節制」と「享受」という両極端の要素を含むことを指摘している[69]。たしかにカトリックの信者は聖体拝領の一時間前には食事も飲料もとらない。また、Hartmanによれば、聖体祭儀で「断食」と似ている点は、キリストの犠牲を静かに思い起こすことや祈り、ゆっくりとした荘重なペースなどが強調されていることである。さらに、拝受する「食物」といえば、ホスチアというごくごくわずかなパンで、ほぼ「食事」とはよべないものだ。

Hartmanは以上の点に、聖体祭儀における「断食」的側面を認めると同時に、共同体が集まり、キリストの救済に感謝しこれを祝う点で「饗宴」的側面もあることを指摘する。この際、イエスは言葉の二重の意味でhostであるという。「ホスチア」すなわち、キリストの体である「犠牲」という意味と「ホスピタリティを提供する者」という日常的な「ホスト」という意味。たしかに、ホスチアを拝受した者を肉体的にも精神的にも養って下さるのだから、気前の良い饗宴のホストだ。

ところで、ホスチアとぶどう酒においてキリストは現前するが、キリストの現前はそれだけではない。

> わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。私たちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです[70]。

> 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらったのです[71]。

> あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です[72]。

上記引用に示したように、「会衆は聖体を拝領することによってキリストと、その体である教会と、そしてそれぞれが互いに一体となり、一致するのである[73]。」キリストの現存は会衆という共同体の中に存在し、信徒はお互いの中のキリストに出会うのだ。

「キリストの体の一部となる」ことは過酷なことでもある。「それはキリストの体が耐えた

ことを喜んで耐え、仕え、打ち砕かれ、他の人の糧となることだ[74]。」　デルペーロのもっと優しい口調を借りれば、「エウカリスティアでキリストを食べ、キリストの体になると、私も『おん父のパン』になり、他の人に食べられるものになります。自分を食べさせる人になります。キリストを食べた人は、他の人、まだ神を知らない人たちのためにパンになります[75]。」

第三項　キリスト教的食倫理としての聖体祭儀

このように、聖体拝受が信徒を変容させるのならば、これはまた信徒の食実践をも変容させうるか、とHartmanは問う。答えは然りだ。聖体拝受は神が望んだように、あるべき形で信徒が食するように促す、つまりキリスト教の食倫理を実践する機会となりうるという。聖体拝受の習慣は、食消費全般に適用され、「キリストが我々に出会い、信徒がお互いに出会う」喜びに満ちた精神的実践を形成すべきだ、とHartmanは説く。「食消費全般に適用」ということは、聖体拝受という食習慣が日常の食消費と切り離されるべきではない、ということだ。

具体的にはどのようなことか。

聖体祭儀は他者と食物を分かち合うという単純な習慣や、神が下さるものを謙虚に受け取るという美徳を涵養する。あるいはより実践的に、飢えている者に食料を共有する組織を支援する行動を促す。Monika Hellwigが主張するように、労働者の抑圧に加担するような生産物は避けるようにする。これらは、キリストとキリストの貧者への愛を体現することに繋がろう。

信徒がキリストを体現すべき、というならば、他者のために犠牲となることも求められよう。注53で挙げた、肉を控え家庭菜園で賄うことを主張したSiderは、収入のごくわずかな一部で生活を賄い、残りをキリストに（つまり貧者に）与えよ、と説く[76]。キリストの身体の一部である信徒は、キリストがしたように、他者を養い他者に施しを与えることで犠牲となること、徹底的な分かち合いと自己供与を厭わない。

先に、「聖体拝受という食習慣が日常の食消費と切り離されるべきではない」と述べたが、それならば、聖餐の精神を拡大解釈して、「一切の食事が秘跡でありうるか？」とHartmanはJungとともに問う[77]。これも然り、である。「食物自体が啓示の手段である。共に食べることを通じて我々は神の善さを味わう。」Berryもまた、日常の食が秘跡であることを論じている[78]。

以上、「断食（できるだけ節制して少量食する）」と「饗宴」という二つの相反する実践の今日的意義を確認し、さらに、この二つが「聖餐」において結びついていることを論じた。また、キリストの体を頂くことで、信徒はキリストの身体の一部となると同時にキリストやほかの信徒と出会い、キリストのように食されるものとなる。すなわち、徹底的な分かち合いと自己供与へと行動が変容する。聖餐は、信徒を変容するばかりでなく、信徒の食習慣も変容する。聖餐は日常の食習慣と切り離されるべきではないならば、逆に日常の食消費自体も秘跡たり得ることが確認できた。

第三章　純女学徒隊の乙女らはなぜ末期の水を他者に譲ったのか

日常の食に秘跡が認められるのであれば、「徹底的な分かち合いと自己供与」となった純女学徒隊の最期も「秘跡」として捉えることができるのではないか。本章では、純女学徒隊の最期を確認した上で「秘跡」としての純女学徒隊の最期について論じる。

第一節　純女学徒隊の最期

本学園では長く語りつがれてよく知られた事象ではあるが、本節では、長崎原爆投下の犠牲となった純女学徒隊の最期について再確認しておきたい。以下は『江角ヤス講話集　生命の道しるべ』、『純女学徒隊殉難の記録』、四條知

恵、『浦上の原爆の語り　永井隆からローマ教皇へ』、高木俊朗、『新版　焼身　長崎の原爆・純女学徒隊の殉難』、妙間光代、『愛ひとすじにシスター江角ヤス伝記』を参照して論じる。

第一項　学徒動員

1936年長崎純心高等女学校が認可され、3月27日、Sr.江角は校長に就任、翌1937年家野町（現・文教町）に修道院、高等女学校移転、純心幼稚園併設、1940年、純心保母養成所設立。

1941年12月8日、第6回創立記念日に戦争勃発、戦争が長期化、激化するにつれ学校教育にも戦時体制が影響を及ぼすようになる。1942年幼稚園階下に「学校工場」設置。1944年、専攻科および高等女学校4年生が「純女学徒隊」として三菱造船所大橋部品工場に動員され、8月には「学徒動員令」の勅令により三年生以上が工場動員となる。1945年5月には「戦時教育令」により2年生以上の全員が動員された。学園に残された1年生にも授業はなく、食糧増産に励んだ。

> 着物は作業服たった一着もらって、それがあの人たちの晴れ着でした。食べ物はお粥の葉っぱのご飯、配給のお米でおなかいっぱい食べさすことが出来ないのです。後でお塩もなくなって海から塩水を持ってくる。焚物はないし、お砂糖は全部飛行機の材料に使われて飴玉ひとつも無い。そういうような極端な不自由な生活、衣がそうですし、食もそうですし、住居の方は、夜ひどいときは空襲警報で三遍くらい起こされました。起きて、防空壕の方に入って行くんです。ですから、衣食住極端な厳しい状態で生きた人たちです[79]。

工場から帰れば、防空壕掘り、という重労働と緊張の連続にあっても、生徒たちは誰一人不平不満を言うどころか、「私たちが頑張らねばお国はどうなりますか」と言っていたそうだ。朝4時半に起床、浦上天主堂まで毎朝ごミサに行った。

この純女学徒隊の生徒たちは13歳から17歳までの女子であった。

第二項　純女学徒隊の最期

1945年8月9日午前11時2分。長崎市松山町上空に原子爆弾が投下され500メートル地点で爆発、原爆中心地から1.3キロメートル地点にあった長崎純心高等女学校では、校舎、寄宿舎、幼稚園、修道院などが倒壊全焼した。『シリーズ　福祉に生きる　江角ヤス』の著者、山田幸子によれば[80]、8月9日、原爆投下当日に死亡した殉難学徒は99名（内訳は、専攻科23名、4年生21名、3年生26名、2年生27名、教職員2名）であったという。また、工場内で即死した学徒39名、帰宅後、自宅で死亡した学徒10名、救護所・病院等で死亡した学徒38名（うち教員1名）。自宅待機中に死亡した学徒は71名（うち教員1名）。最終的に殉難者は学徒教職員併せて214名となった。

殉難学徒の最期は

> …どこの病院、どこのお家から伝えられるお話しも、残らず立派なご最期で、克己、忍耐、犠牲、隣人愛にひいで、聖母賛歌さえもうたっていたという。まことに純心聖母の子にふさわしいものであった[81]。（傍点筆者）

純女学徒隊の最期はこのように「美しい最期」として語りつがれている。

> …普通でも痛いとか苦しいとか口に出すかわりに、美しい聖歌をうたっていたのである。どの子もみんな真実に立派で美しく、模範的な最期であったことは事実なのである[82]。

疎開先として購入していた三ツ山で療養していたSr.江角のもとを訪問する父兄たちは、皆

口々に

> 「先生、うちの娘は大変立派な最期をとげました。親ながら娘のことをほめるのも何ですけれど、お詫びやお礼を言ってお祈りしながら息をひきとりました」「うちの娘は近所となりのおばさん方を集めてくれと申しまして、あの高熱の苦しみの中から、どうしてでるかわからないきれいな声で聖母様の歌をうたい、おばさん方もいっしょに歌ってくれと申し、歌いながら亡くなりました。きれいな最期に家族一同心をうたれました[83]。」

と言ってSr.江角に感謝したという。

高木俊朗の『焼身』には、被爆後、その高熱をあびた影響で多くの被爆者が「水を、水を」、「水ば、水ば」と水分を求める描写が続いている。殉難学徒や教職員とて、水を欲したのは同様であったに違いない。

しかし、飢え乾いたなか、純心の殉難者たちはいまわの際にも、「克己・忍耐・犠牲・隣人愛」に秀でた姿であったことが数多く記録されている。

> …あの混乱と苦痛のうちで先生はあわてず、取り乱されず、愛深く堪えておられましたが、…
> ご臨終まぎわまでの美しいご態度を、私は深い感動なしには思い出せないほどです[84]。（傍点筆者）

として、糸永ヨシは、差し入れられたスイカなどを他者に譲るSr.深堀ハツノの記録を残している。「やけている体でどんなにか水物が欲しかったでしょうに、いつも「他のかたに早くさしあげて下さい」といって、ご自分は最後まで待っておられました[85]。」（傍点筆者）

修練を積んだ修道女だけでなく、純女学徒隊の少女もまた「やけつくようなかわきに苦しまれていた」にもかかわらず、水物を他者に譲っている。糸永ヨシは「松本テルミさんのこと」として

> テルミさんは入院中お見舞いにいたゞいた梨を「もっと苦しんでいられるかたに差し上げてください。私は犠牲をしますから」とおっしゃって、お隣にいた負傷者にさし上げ、ご自分は少しも召し上がられなかったとうかゞっています[86]。（傍点筆者）

と綴っている。

もちろん、「美しい最期」として殉難者の死を受容することが、ある時代、ある共同体で共有された一つの「語り」（の型）である、と『裏紙の原爆の語り　永井隆からローマ教皇へ』の著者、四條知恵に倣うこともできようが、筆者はこの「美しい最期」に、聖餐の秘跡を見たい。

第二節　純女学徒隊の乙女らはなぜ末期の水を他者に譲ったのか：「聖餐の秘跡」としての分かち合い

第二章第三節第三項で検討したように、「聖餐」の秘跡は、日常の食消費と切り離して捉えるべきではなく、むしろ、「食」自体に秘跡が内在する、食が秘跡を顕示するのであれば、教会で司祭によって執り行われる「ミサ」という儀式の外に秘跡を見ることも可能であろう。

聖餐の本質をなすのは「分かち合い」であることを先に確認した。

であれば、純心の殉難者たちが他者に水物であるスイカや梨を譲った事実は、「分かち合い」による「交わりcommunion」にほかならなかったのではないだろうか。

Sr.江角をはじめ純心の伝統では、学徒らの「美しい最期」は「純心教育の賜物」であり、「純心教育は間違っていなかった」と確信する証左であり、「原爆死した生徒の顕彰[87]」に他ならない。

だが、単に宗教教育の成果としていまわの

際に聖母賛歌を歌ったり他者に水（物）を譲ったのではなく、そこに「分かち合い」による「交わり」の秘跡が出来していた、とは考えられまいか。「初代教会における主の晩餐」の著者Alikinは、聖餐という「共同体の食事の目的は、集まったメンバーの間の交わり（仲間、連帯、兄弟愛）を実現することであった[88]。」と述べている。原爆の劫火に焼かれた苦しみ故に、隣合って寝かされていようとも到底その苦しみに思い至らない者どうしの間に、殉難学徒たちは分かち合いの秘跡によって、束の間であれ「交わり」を実現したのではないだろうか。

結論

本稿では、聖書に描かれた「食」の重要性と位置づけを確認した後、「食」を巡って、Fast（断食、節制）とFeast（宴会、ごちそう、大いに食べること）という相反する二つの行為の現代的意義を探り、この二契機を調停しかつ構成要素とする「聖餐」において我々は他者と、またキリストと出会い、かつキリストの一部となる秘跡に与ることを追認した。

ただし、「分かち合い」を最重要事とするこの秘跡は、聖餐に限られたものではなく、日常の食、否、食全般が秘跡の場たるという指摘を受け、本稿は、純女学徒隊の、他者に水分を分かちあたえながら遂げた「美しい最期」を、「分かち合い」による「交わり」の秘跡の場として捉えなおす可能性を示唆した。

＊本稿は、令和4年9月27日に本学図書館ラーニングコモンズ「シオンの丘」で開催された、「純心を知ろう」第4回の講座に加筆したものである。

---

[1] 岡田温司、『キリストの身体　血と肉と愛の場』、p63,
岡田はまた、一般的な葬礼に伴う会食とキリストの「最後の晩餐」を結びつけ、「自分自身の葬式の会食をみずから先取りして行った」とも解釈している点が面白い。同上

[2] 神崎宜武、『「まつり」の食文化』、p.26

[3] “Christianity has inherited a certain laissez-faire attitude about food…”、Hartman Laura M., “Consuming Christ : The Role of Jesus in Christian Food Ethics”, p45（下線筆者）

[4] 山田幸子、『シリーズ　福祉に生きる　55　江角ヤス』、年譜p.2f.
聖書の日本語訳は新共同訳による。

[5] 創世記1.29

[6] 創世記2.99

[7] 創世記2.16

[8] 創世記3.17

[9] 創世記3.19

[10] 出エジプト記16.8

[11] 出エジプト記16.12−14

[12] レビ記25.18−19

[13] 民数記11.4−6

[14] 民数記11.18−20

[15] 民数記21.5

[16] 申命記8.7−9

[17] レビ記26.15−16

[18] レビ記26.20

[19] レビ記26.21−22

[20] レビ記26.23−26

[21] レビ記26.27−29

[22] たとえば、民数記7

[23] 創世記18.1−5

[24] 創世記18.6−8

[25] 異なる時間に属するエピソードを同一画面上に描く技法のこと。

[26] 佐久間勤、「主の御前で人々と主にする食事」、p.18

[27] パン菓子と仔牛料理はおそらく図2のようなものであろう。山口里子、『食べて味わう聖書の話』、パンp.50、仔牛料理p.55

[28] 『聖書　スタディ版　わかりやすい解説付き

聖書　新共同訳』、p.23注

[29] ヨブ記31.16−20

[30] トビト記1.16−17

[31] ちなみに、このモザイク画の魚はガリラヤ湖産とはいえないそうである。18種確認されているガリラヤ湖の魚の背びれはすべて一つだが、モザイク画の背びれは二つあるからだ。山口里子、上掲書、p.42

[32] マタイとマルコには、同様に、「4000人に食べ物を与える」エピソードがある。マタイ15.32−39、マルコ8.1−10

[33] ルカ9.11

[34] マタイ14.15−21（マルコ6.30−41、ルカ9.10−17、ヨハネ6.1−14）

[35] 「パンと魚の奇跡は、荒れ野で神がイスラエルの民を養われた出来事を想起させる（出16章、民11章）。『聖書　スタディ版　わかりやすい解説付き聖書　新共同訳』、p.73注「このパンのふやしの物語を伝えた原始キリスト教会では、これを語る者も聞く者も、旧約聖書にある似たような話を連想したに違いない。とくにモーセが民に糧を与えたという伝承は、ユダヤ人たちにとっては信仰の原点となる言い伝えである。」百瀬文晃、『キリスト教の原点　キリスト教概説［1］、p.149

[36] Ibid.

[37] ただし、現在の典礼文の「食事の終わりに盃をとり…」としているのはルカとコリント信徒への手紙Ⅰのみで、他の福音書ではすべて食事中のこととしている。

[38] 「食べなさい」と言っているのはマタイのみで、他は、「取りなさい」（マルコ14.22）、「このように行いなさい」（ルカ22.19、1コリ11.24）

[39] マタイ26.16−28

[40] マタイ9.9-13（マルコ2.14−17、ルカ5.27−32。ただしここでは、「アルファイの子レビ」、「レビという徴税人」と呼ばれてる。「レビはマタイとも呼ばれる」（『聖書　スタディ版』、p.65注、p.111注）

[41] 『聖書　スタディ版』、p.65注

[42] 申命記5.8

[43] マタイ21.31−32

[44] マタイ20.19

[45] もちろん、一般論であって、初期グノーシス主義から現代のセブンスデイアドベンティスト教会に至るまで「食」に戒律をもうけている宗派もある。

[46] イザヤ書58.6−7

[47] イザヤ書58.4−5

[48] マタイ6.16−18

[49] 『聖書　スタディ版』、p.9注

[50] マタイ4.1、ルカ4.2、マルコには40日間荒れ野での誘惑の記述はあるが、断食には触れていない。またヨハネは40日間の荒れ野の記述はない。

[51] ヨハネ4.34

[52] Hartman, p.48, Habig, Marion ed., St. Francis of Assisi Writings and Early Biographies English Omnibus of the Sources for the Life of St. Francis p.34, “All the friars without exception must fast from the feast of All Saints until Christmas, and from Epiphany, when our Lord began his fast, until Easter.”

[53] マタイ25.40

[54] 家庭菜園でやりくりしたり、肉のかわりに植物由来の蛋白質を摂取したり、あるいは定期的に断食することで食費を節約し、家計から浮いた金銭は貧者への喜捨となり、世界の貧困を救済する一助となると、『飢餓時代の豊かなキリスト教徒』“Rich Christians in an age of Hunger：Moving from Affluence to Generosity” の著者、Ronald Siderは述べている。P.191−193.(Kindle) キリスト教食倫理が世界の不平等の是正の一端を担うというわけだ。

[55] Andrew Limzey, “Animal Gospel”, p.7 (Kindle)

[56] Hartman, p.49, Linzey, ibid., p.14

[57] Hartman, ibid., Wendell Berry, ‘A Native Hill’, p.25

[58] Hartman, p.50

[59] ルカ5.1−6, なお、マタイ4.18−22, マルコ1.16−20にも同様の箇所の記述があるが、魚が大量にかかった奇跡の記述はルカのみで、マタイ、マルコは「人間をとる漁師にしよう」と言って彼らを弟子にした件のみが記載されている。

[60] ヨハネ2.1−10

[61] Hartman, p.5 1

[62] マタイ25.40

[63] 「ともに」食事をすることの重要性は、ことに「エマオでの晩餐」（図版8, 9）に良く表れている。十字架上の死の三日後に復活したイエスは、エマオへの途上にある二人の弟子に現れ、自身のことも語るが、二人はそれがイエスとは気づかない。彼らがイエスだと知るのは、「イエス」が「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。」（ルカ24.30）時であった。（ルカ24.13−35）（マルコには、弟子に現れた件のみ述べられており、食事の記述はない。マルコ16.12−13）。

ティツィアーノの作品（図8）は、盛期ルネサンスに相応しい堂々たるモニュメンタルな構図で、戸外の風景の奥行が空間に広がりを添えている。そのためか、同行して来た旅人がイエスであったという驚愕の事実が明らかになった場面であるにもかかわらず、静謐な印象を湛えている。右側の巡礼者のいで立ちの弟子も、静かにイエスを礼拝している。わずかに、左がわの弟子が、手を広げ身を反らして、「まさか」という風情でイエスを凝視している。

ブルーマールトでは（図9）、ティツィアーノとは対照的に、キリストの背面に壁が迫り緊迫した印象を与えている。マニエリスムの作品らしく、芝居じみた身振りで右側の弟子がイエスを見つめる。背後に描かれた二人の人物が、絵なのか壁に穿たれた開口部からの情景なのか判然とせず謎めいているところもマニエリスムらしい。カラヴァッジオの影響によるか、光と影のダイナミスムもこの情景の演劇性を際立たせている。

いずれにせよ、「パンを裂く」という極めて日常的な行為のうちにキリストを「見た」弟子たちの驚きが十分に伝わってくる。

[64] Hartman, p.51

たしかに、J・アブリも指摘するようなイスラエルの民の考え方、すなわち、パンを「神から与えられるすべての恵みの象徴」（p.16）とする考え方、「神のわざに具体化」（p.17）、神から与えられる「人間の生存に必要なもの」、「神から与えられる恵み」（p.17）の象徴とする考え方を現代人は失っている。しかも、イスラエルの民が、「『食べる』ということばを、ただ食物を食べるという意味だけではなく、精神的な力を得るという意味にも用いた」（p.18）ことに馴染みがないため、われわれは、言葉の十全な意味で「饗宴」に感謝し、喜び、祝福することをそもそも知らない、と言ってよいだろう。Cf. J・アブリ、『命のパン―聖体の秘儀に参加するために―』

[65] Eucharist（ユーカリスト）（「感謝」の意）を聖体祭儀と訳しているが、ホワイト、J.F.,『キリスト教の礼拝』p.323によれば他にも次のような様々な名称がある。「主の晩餐」Lord’s Supper（コリント11.20）、「パン裂き」breaking of bread（使徒2.46、20.7）、「生体礼儀」divine liturgy、「ミサ」mass、「聖餐式」（聖体機密）holy communion、「聖なる賜物」holy Qurbana〔シリア教会の用語、正教会では広く用いられている〕、「主の記念式」Lord’s memorialなど。

[66] Hartman, p.52

[67] 山口里子、『食べて味わう聖書の話』p.96f.

[68] コリントの信徒への手紙Ⅰ 11,23（傍点筆者）

[69] Hartman, p.53
[70] コリントの信徒への手紙Ⅰ 10.16−17
[71] コリントの信徒への手紙Ⅰ 12.12−13
[72] コリントの信徒への手紙Ⅰ 12.27
[73] アブリ、前掲書、p.151
[74] Hartmanp,54
[75] ジュリアーノ・デルペーロ、『エウカリスティア（ミサ）』、p.81
[76] Sider,上掲書p.193加えて、ビールの生産には恐ろしい量の穀物が無駄にされているから、この贅沢（ビール）を犠牲にせよ、とSiderは訴える。実際、アメリカはアルコール飲料生産に5.2百万トンの穀物を消費しているが、これはインドのような国の2億6千万人を養うに足る量だという。Hartman p.62注56
[77] L. Shannon Jung, “Sharing Food: Christian Practice for Enjoyment”, p.132, 135, 138
[78] Berry、前掲書p.281 Berryは「（日常の食事が秘跡であると）知らずに貪欲に破壊的に食するなら、それは冒涜である。こうした冒涜においてわれわれは自身を精神的倫理的孤独に陥らせ、他者を欠乏に追いやる」とすら述べる。
[79]「純女学徒隊殉難の話」（純心学園における江角ヤス先生の放送朝礼　1977年7月19日）、山田幸子編、『江角ヤス講話集　生命のみちしるべ』所載、p.92
[80] 山田幸子、前掲書、pp.87−89
[81] 糸永ヨシ、「あと始末」、『純女学徒隊殉難の記録』所載、p.50f
[82] 徳永義雄、「諫早避難所」、『純女学徒隊殉難の記録』所載、p.64
[83] 山田幸子、前掲書p.91
[84] 糸永ヨシ、「ワレリア深堀ハツノ姉」、『純女学徒隊殉難の記録』所載、p.148
[85] 上掲書、p.149
[86] 糸永ヨシ、「松本テルミさんのこと」、『純女学徒隊殉難の記録』所載、p.269
[87] 四條知恵、『浦上の原爆の語り　永井隆からローマ教皇へ』、p.118
[88] Valeriy A.Alikin, ‘The Lord’s Supper in the Early Church’, p.105

参考文献

・『アートバイブル』、日本聖書協会、2003年
・『新共同訳　聖書』、日本聖書協会、1994年
・『聖書　スタディ版』、日本聖書協会、2006年
・『朝日グラフ別冊　美術特集　西洋編21　ティツィアーノ』、1992年
・アブリ・J,『命のパン―聖体の秘跡に参加するために―』、中央出版社、昭和62年
・井上靖他編、『カンヴァス世界の大画家1　ジョット』、中央公論新社、1985年
・岡田温司、『キリストの身体　地と肉と愛の傷』、中公新書、2009年
・神吉敬三編集解説、『グランド世界美術　第14巻　ベラスケスとバロック美術』、講談社、1976年
・木村重信他監修、『NHK日曜美術館　名画への旅　ヴェネツィアの宴　盛期ルネサンスⅡ』、講談社、1992年
・木村重信他監修、『NHK日曜美術館　名画への旅　光は東方より　古代Ⅱ・中世Ⅰ』、講談社、1994年
・佐久間勤、「主の御前で人々と共にする食事」、『主と食卓を囲む』所載、pp.9−32
・純心女子学園編、『純女学徒隊殉難の記録』、純心女子学園、昭和36年／平成7年
・四條知恵、『浦上の原爆の語り　永井隆からローマ教皇へ』、未来社、2015年
・上智大学キリスト教文化・東洋宗教研究所　編、『主と食卓を囲む　聖書における食事の象徴性』、リトン、2007年
・妙間光代、『愛ひとすじに　シスター江角ヤスの伝記』、智書房、2021年
・高木俊朗、『新版　焼身　長崎の原爆・純女学徒隊の殉難』、角川文庫、昭和55年／59年
・デルペーロ・ジュリアーノ、『エウカリスティ

ア（ミサ）』、ドン・ボスコ社、1997年
・馬場嘉市、『目で見る聖書の世界』、新教出版社、1975年
・ホワイト、J.F., 越川弘英訳、『キリスト教の礼拝』、日本基督教団出版局、2000年
・百瀬文晃、『キリスト教の原点　キリスト教概説　［Ⅰ］、教文社、2004/2008
・山形孝夫、『治癒神イエスの誕生』、ちくま学芸文庫、2010年
・山口里子、『食べて味わう聖書の話』、オリエンス宗教研究所、2018年
・山田幸子、『シリーズ　福祉に生きる　55　江角ヤス』、大空社、2008年
・山田幸子編、『江角ヤス講話集　生命の道しるべ』、長崎純心聖母会、平成20年

・Alikin, Valeriy A., 'The Lord's Supper in the Early Church' in "The Earliest History of the Christian Gathering -- Origin, Development and Content of the Christian Gathering in the First to Third Centuries", pp.103-146
・Berry, Wendell, 'A Native Hill'(1969) in Wirzba, Norman ed. "The Art of Commonplace: The Agrarian Essays of Wendell Berry, Shoemaker and Hoard, Berkeley, CA., 2003 (Kindle), pp.3~32
・Habig, Marion A. ed., Brown Raphael et.al trans., "St. Francis of Assisi Writings and Early Biographies English Omnibus of the Sources for the Life of St. Francis", Franciscan Herald Press, Chicago, 1983
・Hartman, Laura M., "Consuming Christ: The Role of Christ in Christian Food Ethics", in *Journal of the Society of Christian Ethics*, Spring/Summer 2010, Vol,30 No.1, pp. 45-62
・Jung, L ,Shannon, "Sharing Food: Christian Practice for Enjoyment", Augsburg Fortress, 2006, Minneapolis (Kindle)
・Linzey Andrew, "Animal Gospel", Westminster John Knox Press, Louisville, 1988 (Kindle)
・Sider, Ronald, "Rich Christians in an age of Hunger: Moving from Affluence to Generosity", Thomas Nelson Publishers, Nashville, 1997 (Kindle)

図版出典一覧

図1　木村重信他監修、『NHK日曜美術館　名画への旅　光は東方より　古代Ⅱ・中世Ⅰ』、講談社、1994年、p.110
図2　山口里子、『食べて味わう聖書の話』、オリエンス宗教研究所、2018年、パン　p.50　仔牛のシチュー　p.55
図3　馬場嘉市、『目で見る聖書の世界』、新教出版社、1975年、グラビア45
図4　神吉敬三編集解説、『グランド世界美術第14巻　ベラスケスとバロック美術』、講談社、1976年、図版10
図5　『アートバイブル』、日本聖書協会、2003年、p.233
図6　井上靖他編、『カンヴァス世界の大画家1　ジョット』、1985年、p.30
図7　木村重信他監修、『NHK日曜美術館　名画への旅　ヴェネツィアの宴　盛期ルネサンスⅡ』、講談社、1992年、p.106f.
図8　『朝日グラフ別冊　美術特集　西洋編21　ティツィアーノ』、1992年、図版22
図9　Wikimedia
図10　山口里子、『食べて味わう聖書の話』、オリエンス宗教研究所、2018年、p.64